3　歴史的背景

(1) 原始

高岡市域には、約3万年前から人々が暮らしていた。原始の遺跡は、小矢部川の左岸、特に二上山麓と西山丘陵の縁辺や佐野台地、高岡台地に多く分布する。これらは豊かな水資源を確保でき、河川氾濫が少ない狩猟・漁労・採集生活を営むための安定した土地であった。次第に生活が豊かになり、ムラの形成がみられ、集落の中に階層の分化が進むと、有力な集落を核とした地縁集団が形成された。その中心的指導者が豪族や首長へと成長していき、富山県西部における中核的な集落を形成した。

・旧石器時代から縄文時代へ

氷河期の人々は厳しい自然の中で、拠点を持たず、ナウマンゾウなどの大きな哺乳類を追いかけるような生活を営んでおり、市内から当時のナイフ形石器等が出土している。氷河期が終わり、温暖な気候になると、氷河が溶け海面が上昇し、寒い気候に適していた大型の動物が減少した。人々は高岡台地や西山丘陵沿いなど氾濫が少なく安定的な土地でかつ、水が豊富に確保できる場所で集落を形成し、定住化を図った。また、縄文時代には、新たな道具である土器を作り、狩猟・漁労・採集生活の内容が豊かになった。

小野丸山中段遺跡出土

（ナイフ形石器。彫器、削器、尖頭器、石刃、石核）

縄文土器（小竹藪遺跡と勝木原遺跡出土）

・弥生時代のはじまりと稲作

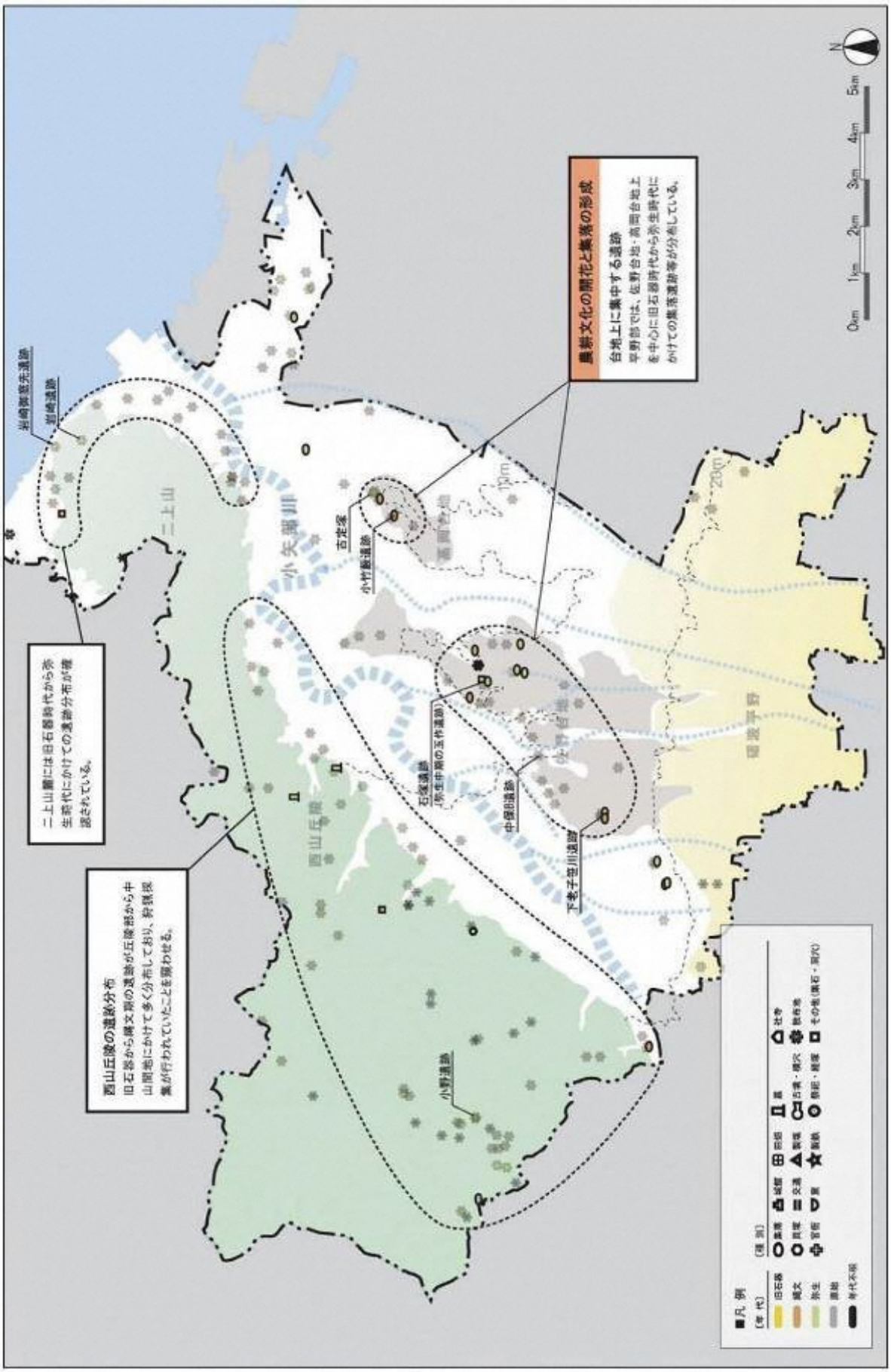
紀元前3世紀、大陸から北九州に伝わった稲作は、弥生中期には富山県域に伝わった。扇状地の末端や微高地・自然堤防上に集落が立地し、近辺の沼沢地や河川流域の低湿地で水田耕作が営まれた。金属の道具も使うようになる。稲作により食料供給が安定する一方で、集落の中に身分の差が広がり、やがて有力な集落を核とした地縁集団が形成され、その中心的指導者が豪族や首長へと成長していった。

・管玉づくり

佐野台地に立地する弥生時代の石塚遺跡や下老子笹川遺跡からは、管玉や勾玉の完成品や製作過程の品に加え、緑色凝灰岩のほかヒスイ・石英・瑪瑙・琥珀などの石材や、石針・石鋸など製作用の石器が出土し、玉作工房があったことが確認されている。管玉や勾玉には、当時の先進地域である山陰・北近畿と同様の製作技法が用いられ、高い技術力が見られる。高岡のものづくり文化のはじまりといえる。

石塚遺跡（弥生土器）

下老子笹川遺跡（管玉生産資料）


農耕文化の開花と集落の形成
台地上に集中する遺跡
平野部では、佐野台地・高岡台地上を中心に旧石器時代から弥生時代にかけての集落遺跡等が分布している。
二上山麓には旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡分布が確認されている。
西山丘陵の遺跡分布
旧石器から縄文期の遺跡が丘陵部から中山間地にかけて多く分布しており、狩猟採集が行われていたことを裏わせる。
岩崎飯盛先遺跡
岩崎遺跡
二上山
小矢部川
古定塚
小竹飯遺跡
石塚遺跡
(弥生中期の五作遺跡)
中屋遺跡
下老子笹川遺跡
小野遺跡
西山丘陵
佐野台地
高岡平野
福岡平野
10km
20km
0km
1km
2km
3km
4km
5km
N
凡例
(年代)
旧石器
縄文
弥生
墓地
年代不明
(遺跡)
集落
城館
貝塚
交通
窯跡
製鉄
祭祀
田畑
製塩
鉄鉱
古墳
社寺
鉄砲鍛
石塔・墓穴
鉄砲・鉄塔
その他(漆石・洞穴)

原始の歴史概要図

(2) 古代

弥生時代の拠点的集落による生活からやがて豪族・首長層による社会が形成され、北陸には「越」と呼ばれる政治権力と領域（クニ）が生まれた。その後、畿内で成立したヤマト王権は、在地有力層を国造や県主に任じ、地方支配を進めた。「越」のクニも伊弥頭国造が置かれ、その支配に組み込まれていく。畿内から広まった古墳文化は高岡市域にも伝わり、二上山麓・西山丘陵には古墳や横穴墓が作られた。

奈良時代になると律令制度が確立されて越中国が成立する。伏木台地には、政治の拠点である国府が置かれ、古代越中の政治や文化の中心地、海陸運送の拠点として機能した。国府の長官である越中国守として最も有名なのは、天平18年（746）から5年間赴任した大伴家持である。家持は当時の国家事業であった東大寺建立を支える荘園の確保の任を請け、越中の広大な穀倉地帯に荘園の選定・確保に努めるなど中央集権体制の強化を図った。

・二上山麓・西山丘陵の古墳と横穴墓群の築造

古墳は、３世紀後半から７世紀にかけて、日本各地で築造された権力者の墓である。小矢部川流域は県内でも屈指の古墳集中地帯であり、当時この地域の人口が多く、栄えていた証である。また、６世紀後半から８世紀初頭は西山丘陵を中心に山腹に横穴を掘って墓を作る横穴墓が築かれた。

氷見平野と伏木台地の間の海を見渡せる高台にある桜谷では、史跡に指定された２基を含め、４世紀後半から５世紀後半を通じて10基以上の古墳が築造されており、大陸や畿内との関係を示す金具や鉄鉾が出土している。日本海を舞台に広大な交易圏を形成する海人集団が存在したことを示している。

桜谷古墳

江道横穴墓群

・大伴家持と越中万葉

大伴家持は、『万葉集』の編纂に重要な役割を果たした歌人で、天平18年（746）から天平勝宝3年（751）まで国守として越中の国府に滞在した。その5年間に詠んだ家持自身の歌223首を含め、越中に関わりのある歌337首が家持の歌日記の形で『万葉集』17-19巻に収められており、「越中万葉」と呼ばれている。その内容は、二上山や雨晴海岸などの越中の自然景観や、国守の職務に関わるものなど多岐にわたり、当時の自然環境や地方政治の一端を今に伝える貴重な資料となっている。

大伴家持像

家持越中巡行推定図
『第六回企画展　越中国と万葉集』
高岡市万葉歴史館/平成 21 年より

越中国庁跡

万葉歌碑

・古代の官道と官衙

中央集権的な国家を維持するため、律令制度によって都と国府を結ぶ駅路が整備された。『延喜式』に記される古代の官道の１つである北陸道には、越中国内に西から坂本（小矢部市埴生付近）―川人（福岡町赤丸付近）―日理（伏木）―白城－磐瀬－水橋－布勢―佐味の８駅があった。坂本駅より小矢部川左岸の微高地上を北上し国府に向かうコースをたどるが、途中、川人駅を経て日理駅辺りで渡河し白城駅へ向かったとみられる。なお、この小矢部川左岸のルートは、近世以降の北陸道と区別するため、山根道と呼ばれる。また、海沿いに能登国から越中国を結ぶ海浜道は、北陸道の支道として越中国府のある伏木、守護所が置かれた放生津、能登を結ぶ道として重要な役割を果たした。

また、佐野台地の東木津遺跡からは木工や漆工などの工房跡が見つかっており、同じく中保Ｂ遺跡では、倉庫群の跡が見つかっている。両遺跡とも船着き場遺構が確認されており、千保川や祖父川によって伏木台地に通じていた。

・古代仏教の伝来

渡来人が伝えた仏教は、巨大な瓦葺き建物や高層の塔、金色に輝く仏像など、異国の最新知識や最先端の技術を伴っていた。豪族は、古墳に代わる権威を示すものとして、競って一族のための氏寺を建立した。

7 世紀中ごろ、伏木台地には寺（御亭角廃寺）があったことが確認されており、その瓦は射水丘陵で生産されたものが用いられている。伊弥頭国造の末裔と言われ、当時の越中の豪族を統括していた射水臣による建立と考えられている。

天平 13 年（741）、聖武天皇は、国分寺建立の詔を発し、奈良の都に東大寺、全国に国分寺を整備させ、仏教の力によって飢饉や天然痘の大流行で疲弊していた国家の安寧を図ろうとした。天平 20 年（748）に国師（国分寺造営に関して選地等の実務を担った）に付き従う僧であった清見の送別会を催したことが、大伴家持が詠んだ歌より確認でき、越中国分寺の造営時期を示している。現在伏木一宮にある国分寺には、平安時代の等身大の仏像が２体伝わっており、往時の壮大さを感じさせている。

御亭角廃寺で使用された瓦

越中国分寺跡

越中国分寺に伝わる仏像

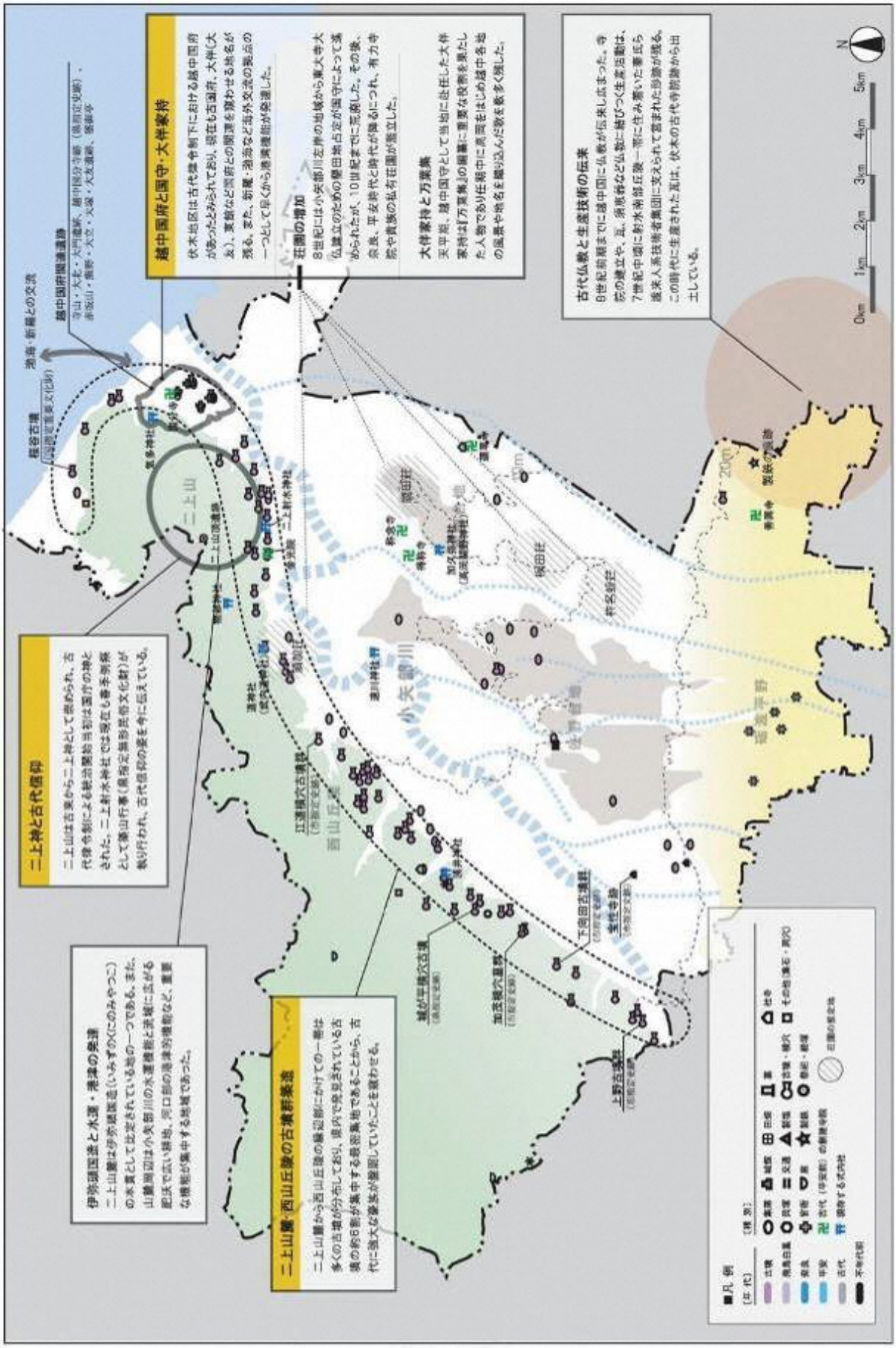
・二上神と古代信仰

古代の人々は自然環境や自然現象に人力が及ばない霊力を感じ、神と崇めた。延長５年（927）にまとめられた『延喜式』神名帳に記される神社（式内社）は市内に８座ある。中でも射水神社は、古くから神山として崇敬された二上山の二上神と一体と考えられ、古代越中国で最高の神階に昇っている。二上射水神社の春の例大祭で行われる築山行事は、天上から神を迎えることや神と山を同一視するなど古代信仰の姿を今に伝えており、高岡御車山の原初形態といわれている。また、同じく式内社で二上山麓に位置する氣多神社は、越中国一宮と伝えられている。本殿は永禄年間（1558～1570）の再建と言われ、重要文化財に指定されている。鎌倉時代の作とされる躍動感と重量感あふれる木造狛犬が伝えられており、当時狛犬にふさわしい社殿が備わっていたと考えられる。春の例大祭において奉納する「にらみ獅子」は行道形式の御祓い獅子であり、古い獅子舞形式を知る上で貴重な事例である。

二上山

二上射水神社の築山行事

氣多神社本殿


越中国府と国守・大伴家持
伏木地区は古代律令制下における越中国府があったとみられており、現在も古国府、大伴(大友)、東館など国府との関連を窺わせる地名が残る。また、新羅・渤海など海外交流の要所の一つとして早くから港湾機能が発達した。
荘園の増加
8世紀には小矢部川左岸の地域から東大寺大仏建立のための墾田地占定が国守によって進められたが、10世紀までに荒廃した。その後、奈良、平安時代と時代が降るにつれ、有力寺院や貴族の私有荘園が設立した。
大伴家持と万葉集
天平期、越中国守として当地に赴任した大伴家持は『万葉集』の編纂に重要な役割を果たした人物であり任期中に高岡をはじめ越中各地の風景や地名を織り込んだ歌を数多く残した。
古代仏教と生産技術の伝来
8世紀前期までに越中国に仏教が伝来し広まった。寺院の建立や、瓦、須恵器など仏教に結びつく生産活動は、7世紀中頃に射水神社丘陵一帯に住み着いた秦氏ら渡来人系技術者集団に支えられて営まれた形跡が残る。この時代に生産された瓦は、伏木の古代寺院跡から出土している。
二上神と古代信仰
二上山は古来から二上神として崇められ、古代律令制による統治開始当初は国庁の神とされた。二上射水神社では現在も春季祭礼として篠山行事(県指定無形民俗文化財)が執り行われ、古代信仰の姿を今に伝えている。
伊弥頭国造と水運・港津の発達
二上山麓は伊弥頭国造(いみずのくにのみやつこ)の本貫として比定されている地の一つである。また、山麓周辺は小矢部川の水運機能と流域に広がる肥沃で広い耕地、河口部の港津的機能など、重要な機能が集中する地域であった。
二上山麓・西山丘陵の古墳群集落
二上山麓から西山丘陵の縁辺部にかけての一帯は多くの古墳が分布しており、県内で発見されている古墳の約6割が集中する稠密集地であることから、古代に強大な豪族が居住していたことを窺わせる。
桜谷古墳
(国指定重要文化財)
海路・新羅との交流
越中国府関連遺跡
寺山・大毛・大門遺跡、越中国分寺跡(県指定史跡)、赤坂山・雨晴・大立・大塚・大友遺跡、東館寺
二上山
気多神社
二上山遺跡
二上射水神社
金光院
江道横穴古墳群
(市指定史跡)
西山丘陵
小矢部川
荒川神社跡
加茂横穴古墳群
(市指定史跡)
越ヶ平横穴古墳
(県指定史跡)
下向田古墳群
(市指定史跡)
生地寺跡
(市指定史跡)
上野古墳群
(市指定史跡)
荒田荘
横田荘
佐野荘
佐野官道
佐野平野
高岡平野
0km
1km
2km
3km
4km
5km
10km
20km
N
凡例
(年代)
古墳
飛鳥白鳳
奈良
平安
古代
不明代期
(様式)
集落
墓地
田畑
寺
社寺
貝塚
交通
製鉄
古墳・横穴
その他(漢石・瓦)
祭祀・信仰
古代(平安期)の新規寺院
現存する古代社
石器の採集地

古代の歴史概要図

(3) 中世

平安時代末になると朝廷は国の統治を国司に一任したため、国府の機能は縮小して国庁は国衙と呼ばれ、国務は国司の館で行われるようになった。鎌倉時代になると気候変動によって海面が下がって伏木の港湾機能が低下し、守護所など政治の中心は放生津（射水市）に移った。砺波平野と伏木・放生津を結ぶ小矢部川左岸は、政治的な混乱により度々戦禍を被ったが、多くの寺院が建立されるなど引き続き越中の大動脈であった。

南北朝の動乱など争いが絶えない状況の中で街道や水路の要衝に自然の地形を生かした城が築かれた。それらはやがて大規模化し、守山城や木舟城などに城下町が整備された。このような混沌とした時代背景において、人々は仏教を強く信仰するようになり、支配者層だけでなく民衆にまで広まっていった。

・源平の争乱、南北朝の動乱、越中大乱

平安時代末に起きた源氏と平氏の戦いは、越中の武士も巻き込み各地で動乱が起きた。寿永２年（1183）、木曽義仲は越中国府で軍勢をまとめ、倶利伽羅峠で平維盛を破った。平氏滅亡後、源頼朝に追われた源義経は雨晴海岸を通り、奥州藤原氏を頼って平泉へ向かったと言い伝えられている。

元弘２年（1333）、後醍醐天皇の討幕計画が失敗し、隠岐に流されると、越中に恒性皇子が流され、二塚に幽閉された。翌年、足利高氏が京都の六波羅探題を襲撃するなど鎌倉幕府の敗色が濃くなり、恒性皇子は、越中守護の名越時有に殺害された。二塚にある皇子の墓所は富山県内唯一の御陵墓となっている。

南北朝時代に入ると、後醍醐天皇の皇子で各地を転戦していた宗良親王が、興国３年（1342）に越中に入り、放生津に近い牧野に館を建て、南朝方の勢力拡大を図ったが、やがて信濃へ移った。

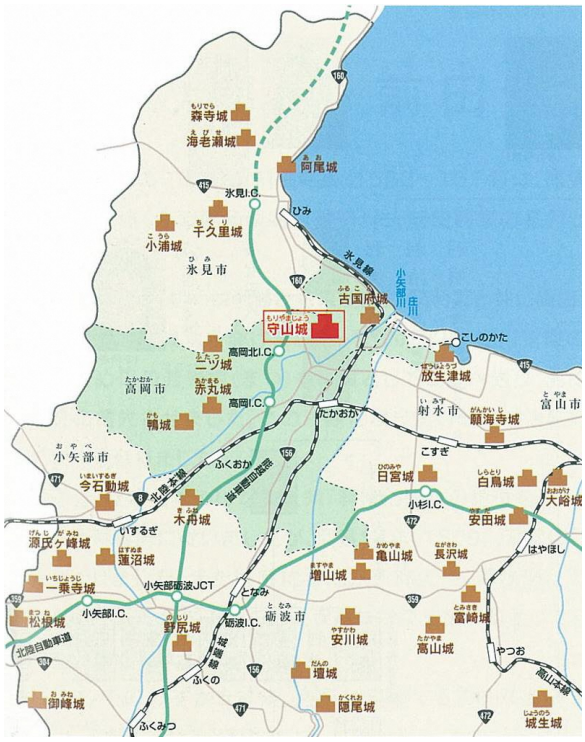
源平・南北朝時代の高岡市周辺の歴史マップ

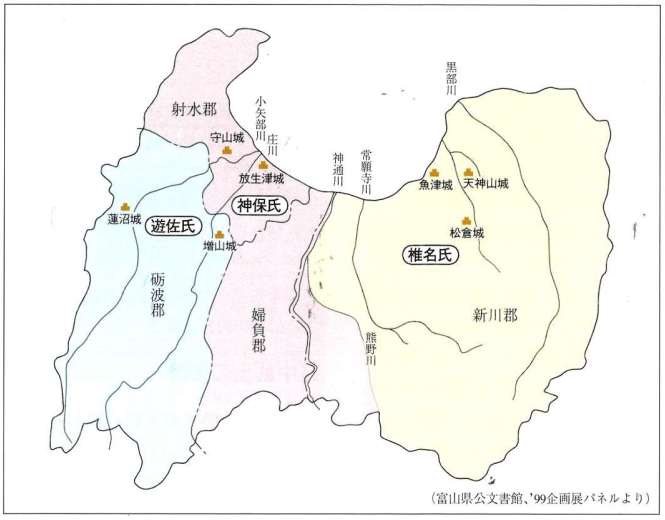
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館/平成 20 年より

南北朝時代後期には南朝の桃井直常と越中守護の斯波氏が五位庄など越中各地で激しく争った。度重な

る戦火により放生津が灰燼に帰したため、守山に守護所が置かれた。応仁の乱の後は、畠山氏が越中守護につくが、越中は神保氏、遊佐氏、椎名氏の守護代によって分割統治された。射水郡と婦負郡を支配した神保氏が有力であったが、3 氏は勢力を争い、支配は安定しなかった。

その後、戦国大名が台頭すると織田勢と上杉勢が越中を巡り争い、天正 10 年（1592）の本能寺の変以後は、羽柴（豊臣）秀吉の天下統一の過程で、加越能国境が前田氏と佐々氏の争いの場となった。秀吉の天下統一によって越中は前田家の領有となり、ようやく社会が安定した。





上：三守護代分治図
『富山歴史館』富山新聞社/平成 13 年より

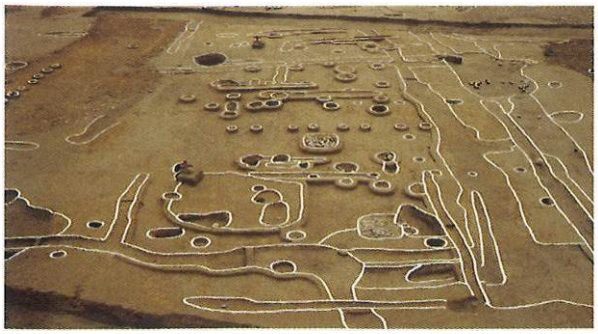
左：高岡市域と周辺の山城位置図
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』
高岡市立博物館/平成 20 年より

・経済・交通の発達

鎌倉時代は、新しい土地の開墾だけでなく、ため池や水車の利用など農業の生産力向上が図られた。生産力が向上した室町時代には、商業が発達して行商人が行き交い、流通が活発となった。社寺の門前や交通の便利な場所において、毎月決められた日に開かれる定期市が開かれた。このため、馬借など運送業のほか様々な職業が登場し、農具や刀を作る鍛冶や鋳物業も盛んとなった。

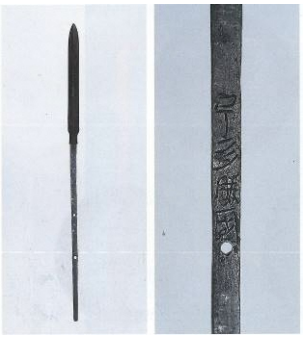
中世における北陸道の主要なルートは、蓮沼（小矢部市）から放生津（射水市）までの舟運と海浜道が直結したものであった。小矢部川左岸には現在、三日市（西五位）、六日市（石堤）、十日市（同）、四日市（同）という集落が並んでおり、定期市が開催されていた名残である。また、倶利伽羅峠を越えて今石動―木舟―戸出―中田―水戸田（射水市）と結び、越中の平野をほぼ最短距離で横切る戸出・中田往来は、重要な道であった。小矢部川との交差する地点には木舟城が築かれ、城下町が広がるなど中世末には戸出・中田往来が北陸道の主流となった。

木舟城下町は、鍛冶に関係した炉跡をはじめ、炉壁・鍛冶滓などが出土しており、鍛冶師・鋳物師が活躍した職人の町であった。また、五位庄の三日市には大和国宇多郡の刀工宇多一派が移り住んだ。宇多派の刀剣類は秀作が多く、加賀藩で珍重された。般若郷の金屋（戸出）の鋳物師は高岡に招かれて高岡鋳物を興している。



開發大滝遺跡

木舟城跡出土遺物



槍　銘　宇多　勝国

・禅宗の隆盛

中世は仏教が高岡市域の各地に浸透した。浄土宗が国衙の官人を経由して広まり、その後浄土宗の流れを組む時宗が広まっていった。越中における時宗の教化は、正応５年(1292)の二祖と称される他阿によって行われた。港湾や宿などの交通を重視し、舟運を活用した時宗は放生津周辺から小矢部川流域に広まった。放生津は越中における時宗宗徒の拠点になり、海上交易にも進出して放生津の経済的発展の原動力となった。

南北朝時代以降、越中の支配層の宗教は主に禅宗であった。臨済系禅宗では、密教色の濃い法燈派が越中に進出し、放生津の興化寺は、守護である斯波氏や畠山氏の外護を受けて発展し、二上山中には国泰寺（臨済宗国泰寺派大本山）が開かれた。また、越中における最初の曹洞宗寺院は、手洗野にある信光寺である。畠山氏が越中守護となり、その守護代として放生津に神保氏が入った後の文明10年（1478）頃、信光寺は神保氏の外護を受けるようになった。このように、禅宗寺院等は守護大名の外護を受けて布教を広め、発展していった。

国泰寺（臨済宗寺院）

信光寺（越中で最初の曹洞宗寺院）

・勝興寺と一向一揆の争乱

富山県は「真宗王国」と呼ばれ、浄土真宗寺院が多い地域である。勝興寺は浄土真宗が畿内から北陸へと教線を広げていく中で、拠点となった寺院である。勝興寺の歴史は、浄土真宗中興の祖とされる本願寺８世蓮如が、文明３年（1471）に北陸布教の途中で営んだ土山坊（南砺市）に始まると伝わる。

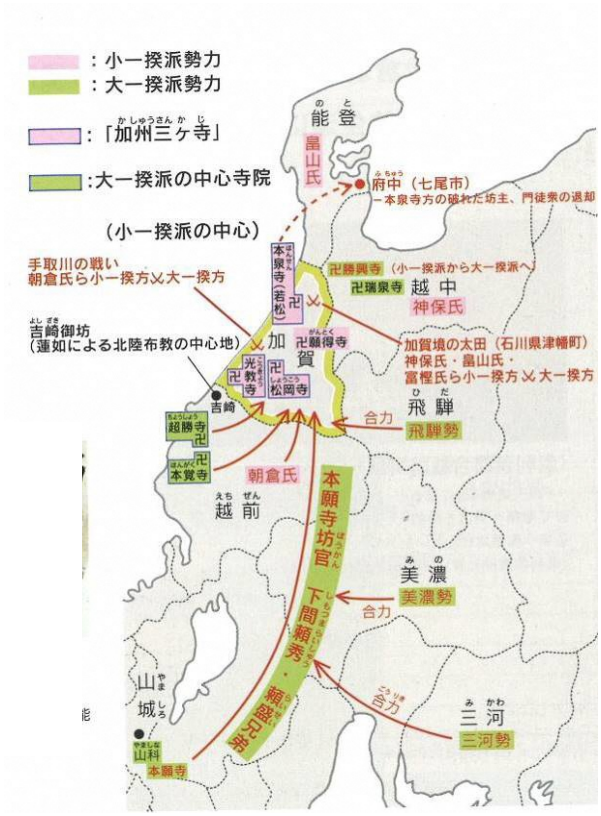
浄土真宗は「一向宗」とも呼ばれ、室町時代後半には門徒衆による一向一揆が起きた。越中門徒は、はじめ加賀門徒の指導者である本泉寺蓮悟（蓮如７男）に従ったが、加賀一向一揆同士の内紛、大小一揆（享禄の錯乱）をきっかけに、勝興寺と瑞泉寺(南砺市)に率いられるようになった。勝興寺は先の内紛で本願寺側に味方したことで、教団内部でも重要な地位を占めるようになった。

戦国大名に比肩する勢力となった本願寺は、天下統一を目指す織田信長に対抗し、勝興寺や瑞泉寺は、本願寺派として織田勢と抗争を繰り広げた。

伏木古国府における勝興寺の歴史は、天正 12 年（1584）、越中を治めていた佐々成政の配下である守山城主神保氏張が、勝興寺に「府之分一円」を寄進することにはじまる。成政は、東海地方で勃発した小牧・長久手の戦いと連動して、加越能国境で羽柴秀吉方の前田氏と抗争を開始する。前田氏との戦いに敗れた成政は、秀吉に対抗するため勝興寺に古国府の土地を寄進し、越中一向一揆の勢力の懐柔を図った。その後、成政は秀吉に降伏するが、秀吉、前田氏も勝興寺に禁制を与え、寺の治安と権利を保障した。

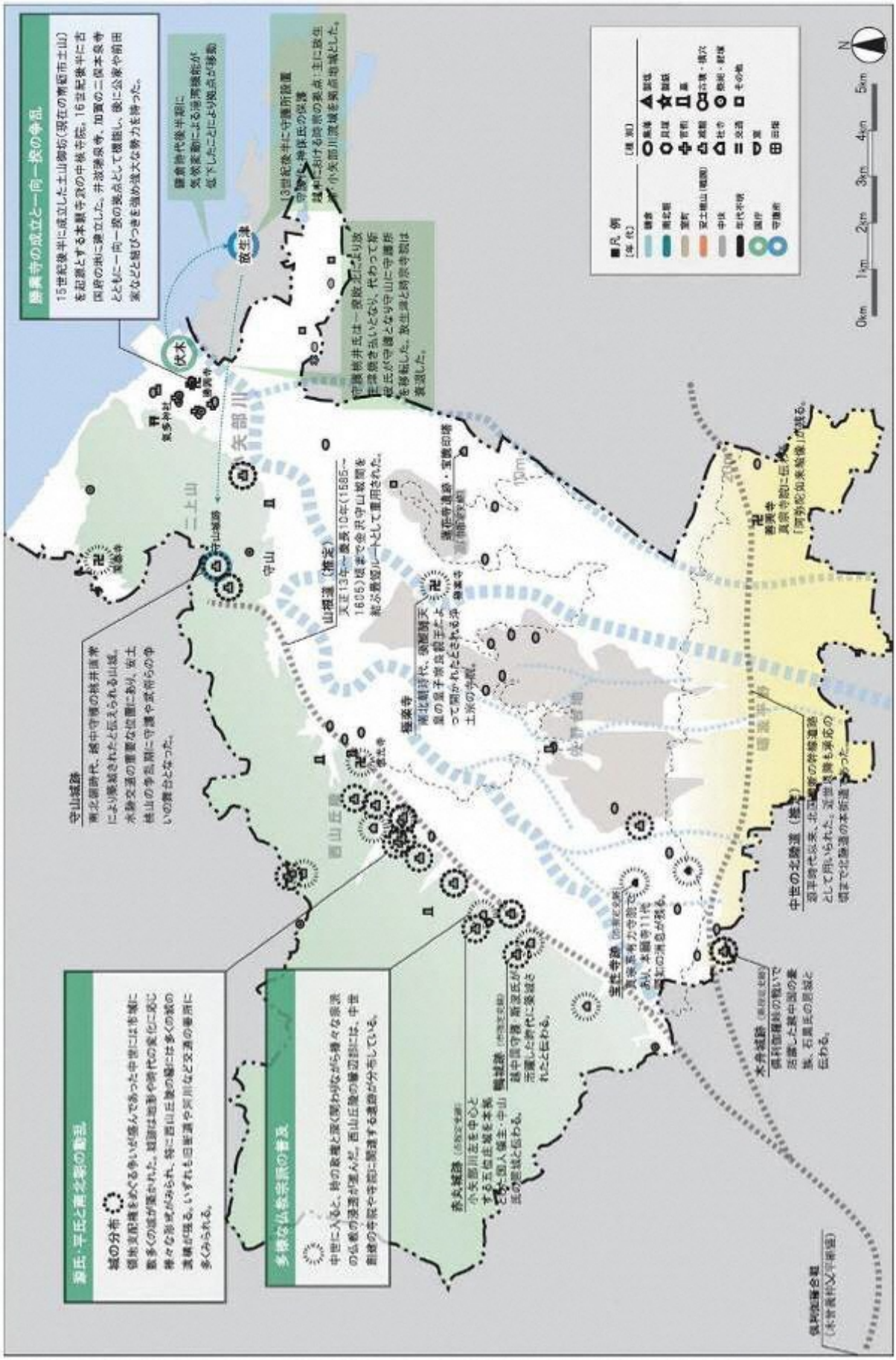
本願寺が東西に分裂すると勝興寺は、西本願寺派における越中の代表寺院となり、前田氏と関係を深め、やがて加賀藩の越中統治の仕組みに組み込まれていく。

勝興寺移転図（年代は創建された年）



享禄４年（1531）時の大小一揆（享禄の錯乱）
勢力分布図

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館/平成 20 年より


願興寺の成立と一向一揆の争乱
15世紀後半に成立した土山御坊(現在の所在地土山)を起源とする本願寺派の中核寺院。16世紀後半に古四府の地に建立した、井波瑞泉寺、加賀の二俣本願寺とともに一向一揆の拠点として機能し、後に公家や前田家などと結びつきを強め強大な勢力を持った。
戦国時代後半期に気候変動による海岸線が低下したことにより拠点が移動
13世紀後半に守護所設置
守護代・神保氏の居館
越中における政治の要者：主に放生津・小矢部川流域を拠点地域とした。
守護神保氏は一揆鎮圧により放生津焼き払いとなり、代わって斯波氏が守護となり守山に守護所を移転した。放生津と時宗寺院は衰退した。
放生津
伏木
二上山
守山
小矢部川
守山城跡
南北朝時代、越中守護の桃井直常により築城されたと伝えられる山城。水陸交通の重要な位置にあり、放土桃山の争乱期に守護や武将らの中いの舞台となった。
天正13年～慶長10年(1585～1605)頃まで金沢守山城間を結ぶ幹線ルートとして運用された。
瑞龍寺
高岡市
砺波市
富山市
氷見市
高岡市
富山市
氷見市
中世の北陸道（推定）
平安時代以降、北国街道の前身道路として用いられた。近世以降も幕府の領国で北陸道の本街道であった。
木舟城跡
倶利伽羅峠の戦いで活躍した越中国の豪族、石黒氏の居城と伝わる。
倶利伽羅峠合戦
（木曽義仲VS平家軍）
海氏・平氏と高松城の動乱
城の分布
領地支配権をめぐる争いが絶えない中世には市域に数多くの城が築かれた。城跡は地形や時代の変化に応じ様々な形式がみられ、特に西山丘陵の城には多くの城の遺構が残る。いずれも日本海や河川など交通の要所に多くみられる。
多様な仏教宗派の普及
中世に入ると、神の教義と深く関わりながら様々な宗派の仏教の浸透が進んだ。西山丘陵の麓辺部には、中世創建の寺院や寺院に関連する遺跡が分布していた。
赤丸城跡
小矢部川左岸を中心とする石黒氏城郭系
鞍馬城跡
越中国守護 斯波氏が活躍した時代に築城されたと伝わる。
0km
1km
2km
3km
4km
5km
N

中世の歴史概要図

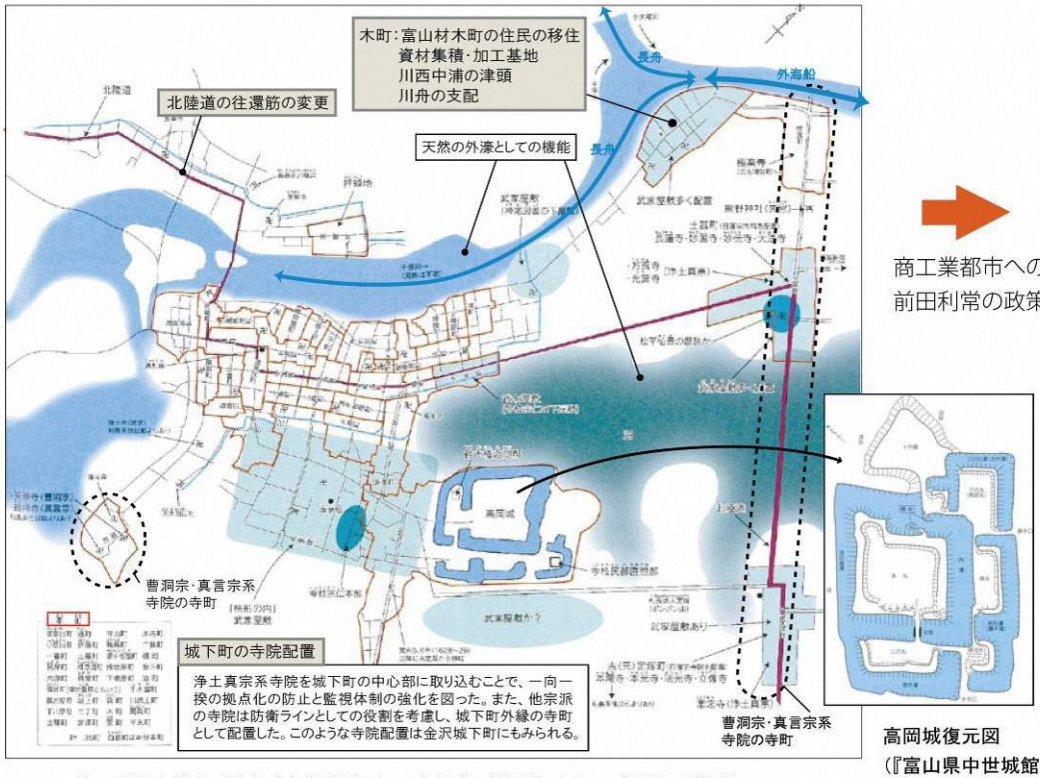
(4) 近世

関ヶ原の戦いののち、前田氏は加賀・能登・越中の３国を治めることとなった。加賀前田家２代当主の前田利長は、慶長 10 年（1605）、異母弟の利常に家督を譲り隠居した。しかし、実権は持ち続け、慶長 14 年（1609）、３国を治める適地として高岡台地に高岡城を築造し、城下町を整備した。慶長 19 年(1614)、利長は死去し、高岡城は築城から５年も経たずに廃城となった。衰退する高岡は３代当主利常によって商工業の町へ転換が図られ、加賀藩の多くの政策によって物資の集散地の性格が与えられた。商人は職人と連携して地場産業を発展させ、鋳物や麻、綿の生産地として成長し、「加賀藩の台所」といわれるようになった。また、加賀藩の「改作法」と呼ばれる農政改革により、安定的に年貢を収集するシステムが確立され、現在の集落分布の基本形が成立した。

① 前田利長による高岡築城と城下町

高岡城が築かれた高岡台地上の関野と呼ばれる地は、当時庄川の本流であった千保川と、中田川・大門川などの庄川分流、さらに城地東側に広がる沼沢地からなる天然の水堀で囲まれた要害で、小矢部川の水運により流通経済の発達の面においても好適地であった。

城下町は中川・古定塚・土器町（現在の大坪町）・平米町・木町等を武家地とし、さらに越中・能登・加賀の領内３国（現富山県・石川県）だけでなく、尾張・山城・近江・越前・越後・信濃等前田氏ゆかりの地から町民を集め、35 町からなる町民地を形成した。さらに守山・富山の旧城下町をはじめ射水・砺波郡から寺院を城下に招致して保護を与え、軍略的な配置に心を配った。城の東の街道沿いに主に日蓮宗・浄土宗の寺院を、城の西・市街地の南端に曹洞宗・真言宗の寺院を配置し、浄土真宗の寺院は市街地内に取り込まれた。また、金屋町の鋳物業、川原町の魚鳥商売、檜物屋町の指物・漆器、木町の木材・薪炭・回漕業等、重要な職業には職種によって場所を指定し、数々の特権を与え、町の繁栄を図った。



前田利長在城時（慶長 14〔1609〕年～慶長 19〔1614〕年）の高岡町（推定）
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館
／平成 20 年掲載図を転載・一部加工

高岡城復元図
（『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
富山県埋文センター平成
18 年発行より）

② 前田利常による高岡の再建～商工業都市への転換～

慶長 19 年(1614)に利長が死去し、さらに慶長 20 年(1615)の「一国一城令」により高岡城は廃城とされ、高岡町は急速に衰退した。加賀前田家３代当主利常は、御荷物宿の設置、魚問屋・塩問屋の創設を認める等、高岡の衰退を押し止め、商業の町として再興を図る政策を打ち出した。これはのちに高岡が、「加賀藩の台所」といえるほどの経済都市に発展する基盤となる。他にも北陸道のルートの変更、郊外寺院の町中への移転、旧武家地への町民移住と地子町化、利長墓所の造営、瑞龍寺の大改修など、都市計画の面からも対策を講じた。

江戸時代末期の高岡町（推定）
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館／平成 20 年掲載図を転載・一部加工

・北陸道の変更と主な街道

北陸道は戸出・中田往来が中心となっていたが、利長が高岡城を居城とすると今石動から小矢部川を渡り、高岡町域を経由するルートが本街道となった。高岡廃城後はルートが町中を通るように変更し、これまで小馬出町―平米町―土器町―古定塚町となっていた道順を、小馬出町から右折し、坂下町の坂を上って、大仏前で左折し、城道で再び右折、定塚町―大野―蓮華寺を経て庄川へ至る道とした。街道沿いには、高岡築城前から市場を設けることを許されていた立野以外にも福岡町や和田新町など新たに町が設けられ、にぎわった。道の両側には 10～15m間隔で往還松が植えられ、参勤交代の行列が通過した。その他近世における主な街道は次のとおりである。

戸出・中田往来

上記のとおり脇街道となったが、戸出に御旅屋が設置され、藩主の鷹狩りの際や幕府から派遣される巡見上使の視察ルート（御上使往来）として大いに活用された。

氷見往来

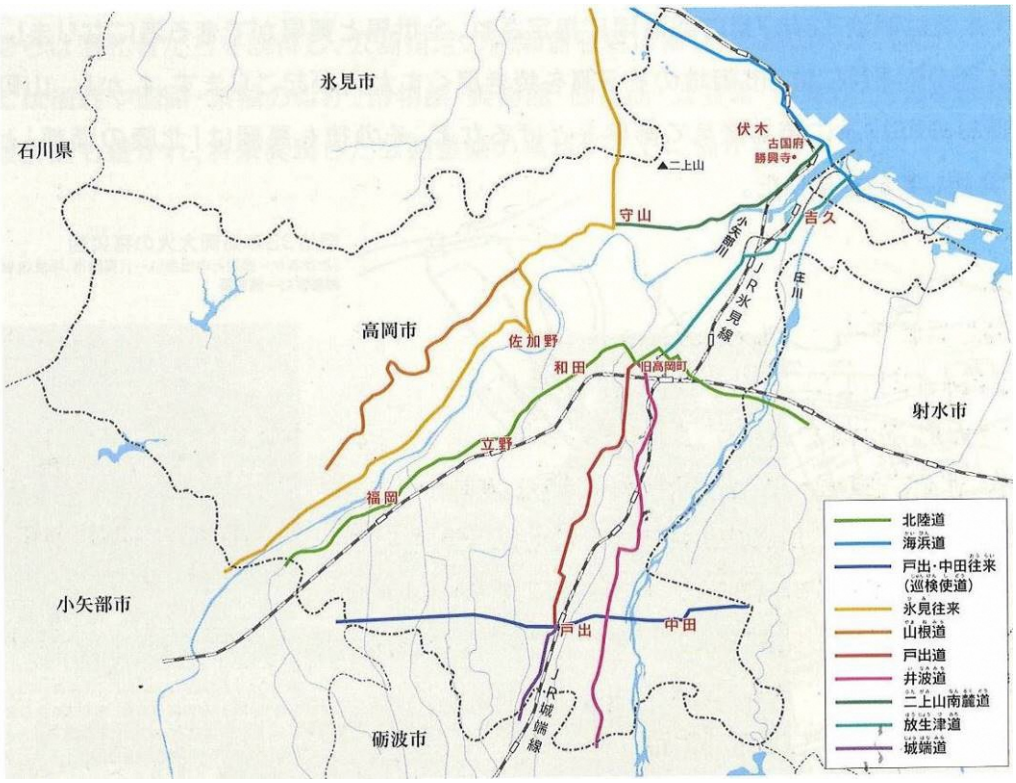
今石動から小矢部川左岸の平野部を通り、二上丘陵と西山丘陵を分ける海老坂峠を経由して氷見へ通じる街道である。かつて守山城の城下町であった守山町や小矢部川が大きく蛇行する突出部の左岸の佐加野村は交通の要衝として宿駅が置かれた。御上使往来として利用され、漁業の中心地である氷見海岸で漁獲した魚類を金沢に運ぶための重要路線であった。

戸出道

道は、高岡から戸出、砺波（砺波市）、福野（南砺市）、城端(南砺市)に至る砺波平野を縦断するもので、戸出から城端は御上使往来であった。

井波道

庄川の左岸沿いに高岡から大清水(戸出)を経て井波(南砺市)へ至るもので、「中筋往来」とも呼ばれる。現在の庄川と、もとの庄川の流路であった千保川の間の筋という意味である。



高岡市内の主な町々と街道

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館/平成 20 年より

③ 前田利長墓所と瑞龍寺

３代当主利常は、自身に 120 万石を譲った異母兄の利長を深く敬愛していたと言われ、それは利長墓所の造営、瑞龍寺の大改修などに表れている。前田利長墓所は、利長の 33 回忌に当たる正保 3 年（1646）に造営されたもので、二重の堀で囲まれ、中心に加賀産の戸室石（安山岩）で化粧された基壇に墓標が立つ。基壇に施された「蓮花図」は狩野探幽の下絵になると伝わる。墓域全体は５万坪で大名個人の墓地としては雄大な規模をもつ。

瑞龍寺は、元は利長が高岡における前田家の菩提寺として建てた法円寺で、利長の死後、その法名「瑞龍院殿聖山英賢大居士」から瑞龍寺と改められた。正保 2 年（1645）から加賀藩御抱大工の山上善右衛門を棟梁として伽藍の造営が始まり、利長の 50 回忌に当たる寛文 3 年（1663）に完成した。総門、山門、仏殿、法堂が東西に一直線上に並び、山門から法堂まで仏殿を囲むように回廊を設ける荘厳な姿は「伽藍瑞龍」として名をとどろかせた。また利常は、多くの宝物を瑞龍寺に寄進しており、利長への思いが見える。

④ 高岡の商業と米場・綿場

高岡を商業の町にするための施策のうち、米場と綿場が経済的な隆盛をもたらした。

高岡米場は、寛文年間（1661～73）に米の動きを統制し、米価の調整を図るとともに、領内における米の円滑な流通に配慮するため藩が設置した。高岡では３万石を超える給人米が蔵宿を通して払い出されるほか、百姓売米も売買された。米場を中心にして米と金と人が大きく動いたのである。

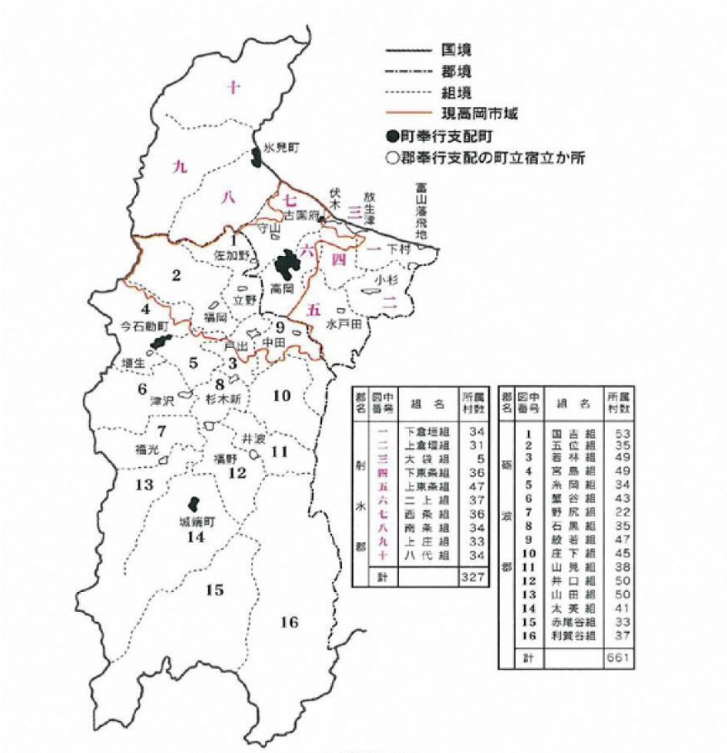
また、越中は全国有数の麻布（八講布）の産地で、高岡はその集散地として、寛永 12 年（1635）に布御印押人が設置され、越中産の麻布はすべて高岡で検印を受けて売り出すこととなった。さらに、寛文 11 年（1671）には締綿（精製綿）市場が設置され、文政７年（1824）には加越能三国での綿販売の独占権を与えられた。高岡に集められた綿は新川郡など藩内の織物産地に供給されて綿布となり、再び高岡に集められて染色加工され、「高岡染」として関西などに販売されて高岡町の経済発展に大きく寄与した。

⑤ 加賀藩農政の確立～改作法の施行～

藩の農村支配は、当初、藩や家臣（給人）がそれぞれ土地を支配しており、年貢を取り立てた。支配をめぐる農民とのトラブルは絶えることがなく、問題は年々深刻になっていた。このような事態を受け、前田利常が中心となり、改作法と呼ばれる徹底した農政改革が行われた。精緻な検地や村への定率課税などによって徴税の合理化を図るとともに農民の救済制度を設け、百姓の生活を維持しつつ年貢を安定的かつ確実に徴収することを図った。この改作法は加賀藩農政の基本となった。

・郷村支配機構としての十村制度の整備

十村制度は藩が十か村を単位として「組」をつくり、有力農民の「十村」や「肝煎」によって統轄を行う制度である。加賀藩の改作法では、家臣の土地支配を廃し、取り立てや支配を廻る農民とのトラブルを解消した。代わりに農民から優れた人材を「十村」として取り立て、農政を任せることで、郷村の間接的支配機構を確立した。



郡名	図中番号	組名	所属村数
射水郡	一	下倉垣組	34
	二	上倉垣組	31
	三	大袋組	5
	四	下東条組	36
	五	上東条組	47
	六	二上組	37
	七	西条組	36
	八	南条組	34
	九	上庄組	33
	十	八代組	34
計			327

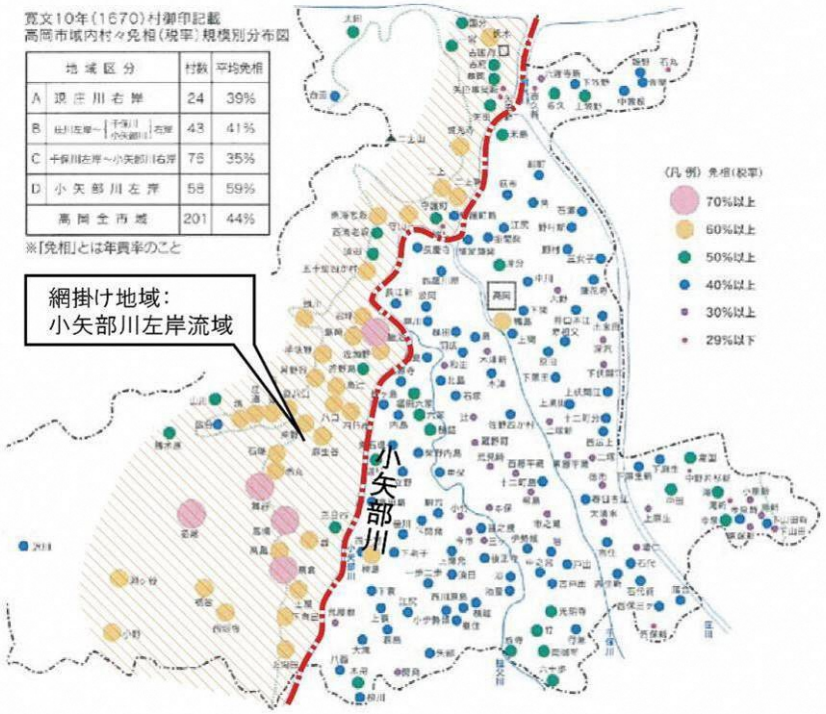
郡名	図中番号	組名	所属村数
砺波郡	1	国吉組	53
	2	五位組	35
	3	若林組	49
	4	宮島組	49
	5	糸岡組	34
	6	蟹谷組	43
	7	野尻組	22
	8	石黒組	35
	9	般若組	47
	10	庄下組	45
	11	山見組	38
	12	井口組	50
	13	山田組	50
	14	太美組	41
	15	赤尾谷組	33
	16	利賀谷組	37
計			661

十村組割図

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館／平成 20 年より

・標準収穫量と年貢率の平準化

改作法が施行された後の寛文年間（1661～1673）の年貢率をみると、小矢部川右岸の庄川流域は、度重なる河川の氾濫によって荒れ地になることも多いため、年貢率は低く抑えられている。一方、氾濫の影響が少ない小矢部川左岸地域は、古代から農耕に適した土地としてみなされ年貢率は高く設定されている。小矢部川両岸における対照的な自然条件を反映し、年貢率を調整することで領内農民の生活水準の平均化が図られていた。

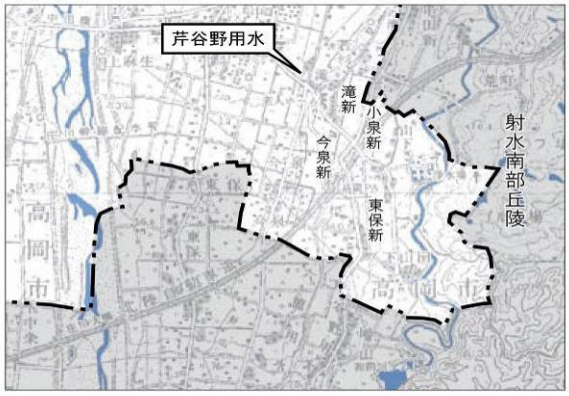


図：寛文 10 年（1670）村御印記載高岡市域内村々免相（税率）規模別　分布図
『たかおか一歴史との出会い一』高岡市政 100 年記念誌編集員会／平成３年掲載図を一部加工

・河川改修・灌漑用水の開削と新田開発

加賀藩の改作法では、農地の拡大や生産性を高めるための様々な対策が講じられた。承応２年（1653）から正徳４年（1714）にかけて堤防の造成工事や氾濫原となっていた庄川上流部の締切工事を行い、庄川伏流の用水化や旧河道廃川地の新田開発が進められた。また市域南東部の芹谷野段丘では、後方に控える射水南部丘陵と隔絶されているため水利に恵まれなかったが、庄川上流から用水を引き段丘上に新田を開いた。「新」と付く地名の大部分は近世の新田開発により開かれた村の名前であり、現在も市域の各地でみられる。

芹谷野用水



芹谷野用水の現状と新村

・米、その他特産物の流通システムの構築

高岡市域を流れる小矢部川や庄川、庄川の旧本流である千保川とその分流である祖父川は、街道とともに商都高岡の経済発展を支えた重要な流通網であった。加賀藩は主要な河川や街道沿いに藩の年貢米を納める御収納蔵を設置して周辺のムラの収穫米を集め、長舟によって木町や伏木に運搬した。主要街道が通る高岡町は、船着場のある木町や「山町（やまちょう）」といわれる中心街などで、米・綿・麻・塩などが取り引きされる、物流の拠点であった。町民の生活必需品を供給するための小売業だけでなく、加越能三国全域の商品の流通を担当する問屋業で栄えた。やがて高岡は「加賀藩の台所」といわれるまでになり、今日の商都高岡の礎となった。

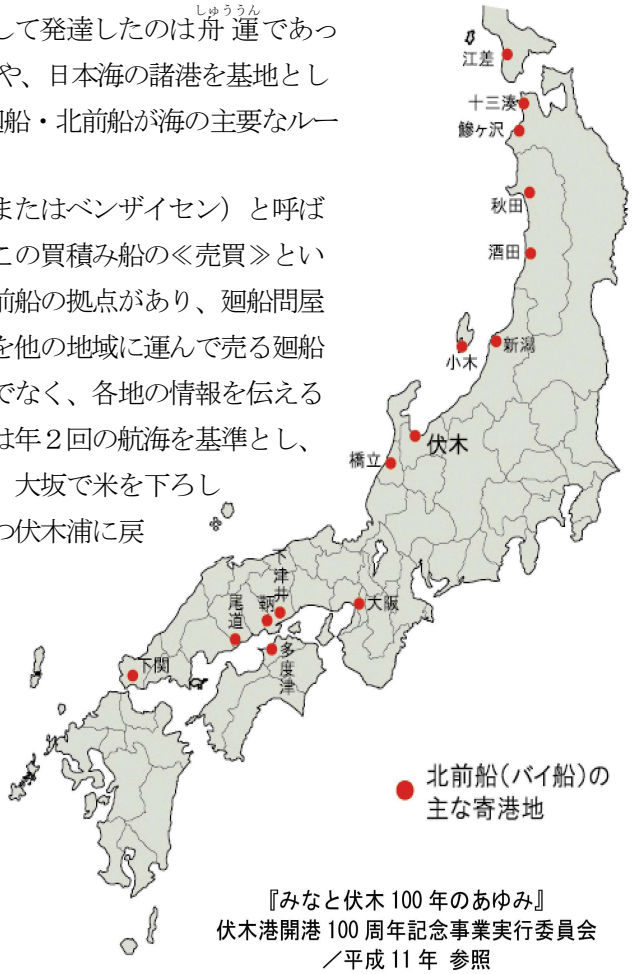
※米場：米の出入や売買を監視する役割を担った。
綿場：加賀藩の主要産物であった木綿の原料綿を供給する役割を担った。

米、その他特産品の主な流通経路

⑥ 伏木浦の繁栄～北前船航路の発達～

江戸時代、物資を大量に安価に運ぶ物流手段として発達したのは舟運であった。江戸と大坂を結ぶ菱垣廻船・樽廻船の定期船や、日本海の諸港を基地として南は下関、北は蝦夷地まで不定期に往復する廻船・北前船が海の主要なルートであった。

北前船は能登外浦以西では弁財船（ベザイセンまたはベンザイセン）と呼ばれたが、内浦以東で「バイ船」と呼ばれたのは、この買積み船の≪売買≫という語に関係があると考えられている。伏木には北前船の拠点があり、廻船問屋が何軒もあった。北前船は、各港で積荷した品物を他の地域に運んで売る廻船で、都市に住む人々が必要とする物資を運ぶだけでなく、各地の情報を伝える役割を担い、経済圏の広域化に貢献した。北前船は年２回の航海を基準とし、旧暦の２～３月に伏木浦で米を積んで大坂に赴き、大坂で米を下ろし雑貨類を満載し、途中の寄港地で積荷を売買しつつ伏木浦に戻った。次に米や藁工品を積んで東北や蝦夷地へ赴き、帰路には昆布、魚肥、木材等を積み、旧暦９～10 月に伏木浦へ帰った。蝦夷地の特産である魚肥製造には高岡鋳物のニシン釜が用いられ、昭和初期まで続く大ヒット商品となった。伏木の北前船は、近世後期の富山湾岸地域の経済発展を牽引した。



『みなと伏木 100 年のあゆみ』
伏木港開港 100 周年記念事業実行委員会
／平成 11 年 参照

⑦ 花咲く町民文化

江戸後期になると経済力が高まり、庶民の生活は著しく向上した。加賀藩の学問を重視する気風は町人の間にも伝わり、町では商人や医者、農村では十村（庄屋）や肝煎などの富裕層に漢詩や茶の湯、生け花などが広まった。また、高岡開町に由来する高岡御車山には、モチーフなどに見られる教養、美術工芸や音曲の技量、それらを発揮させる経済力など、町の文化の力が注ぎこまれた。

・俳諧の流行

元禄年間（1688～1704）には俳諧がさかんであった。元禄２年（1689）に万葉集など和歌に詠まれた歌枕を訪ねて東北から北陸地方を旅し、紀行文「おくのほそ道」を記した松尾芭蕉が、高岡で一泊している。やがて越中でも芭蕉の流れを組む俳諧が盛んになり、戸出出身の俳人尾崎康工などが有名である。句集として『射水川』、『越中集』、『狐の茶袋』などが出版された。『狐の茶袋』は昭和に至るまで続編が刊行されている。

・高岡御車山

高岡御車山祭は、高岡関野神社の春季例大祭として毎年５月１日に行われる。高岡御車山の原型は、豊臣秀吉が後陽成天皇を聚楽第に迎えた時の乗り物を、前田利家が譲り受け、それを２代当主前田利長が高岡開町に際し町民に与えたものと伝えられている。高岡町民は、高岡御車山を模倣する町があればやめさせ、ときには藩の倹約令にも従わずに彫金・漆工等の高岡の伝統工芸の粋を集めて豪華に装飾し、約 400 年間守り続けてきており、現在も高岡のシンボルとなっている。

高岡御車山祭

高岡御車山の車輪（二番町）

⑧ 高岡町が育んだ産業

高岡は、商人の町であると同時に職人の町でもあり、商工の中心であった。鋳物をはじめとして様々な産業が高岡の町の経済を支えていた。

・鋳物

高岡の鋳物生産は、高岡開町の際に前田利長が砺波郡西部金屋（にしぶかなや）から招いた７人の鋳物師（いもじ）の手によって始まったと伝わる。藩から手厚い保護や特権が与えられる一方で、鋳物師業界や藩のしきたりにより、品目や販売域などに制限を受けていた。高岡の商人と職人は商品開発を進めて販路を広げ、やがて高岡の鋳物は、加賀藩の御用鋳物師であった能登中居（石川県穴水町）を脅かす勢力となった。当初の鋳造品は、鍋、釜、鉄瓶、五徳など生活用の鉄器具類と、鋤や鍬などの農具類が主であった。18 世紀末には鉄製の塩釜を作り、天保初年にはニシン釜で北海道へ進出した。銅器鋳造物は 18 世紀に現れ、梵鐘や半鐘・灯籠など大型の鋳造物にほかに、生活水準の向上とともに、仏具、花瓶、火鉢などを生産するようになった。高岡の銅器商人は全国一円に販路を広げ、幕末には横浜の外国人居留区にも販路を伸ばした。

・漆器

高岡の漆器は高岡開町の際、指物（さしもの）を製造する町ができ、それに漆を塗ることから興ったと伝えられている。藩によって一般町民の奢侈は禁止されたため、金を用いずに装飾する技法が発達した。幕末から明治にかけて勇助塗（ゆうすけぬり）、錆絵（さびえ）、青貝塗（あおがいぬり）などの独創的な技法が確立し、漆器産地としての基盤が築かれた。

・菅笠

砺波郡の特産品である菅は、旧福岡町地域を中心とした小矢部川下流域に加賀藩の奨励を受けて作付面積が拡大した。小矢部川の氾濫原である湿地帯に菅が自生していたことが起源の一つとされる。農家の副業として菅笠づくりが行われた。江戸時代中～後期になると、独立した笠問屋が福岡町や立野町で多くみられるようになり、藩の産物会所が福岡町に設置されて砺波郡域の菅笠集散地として機能するようになった。製作された菅笠は、「加賀笠」の名で広く知られた。

・和傘

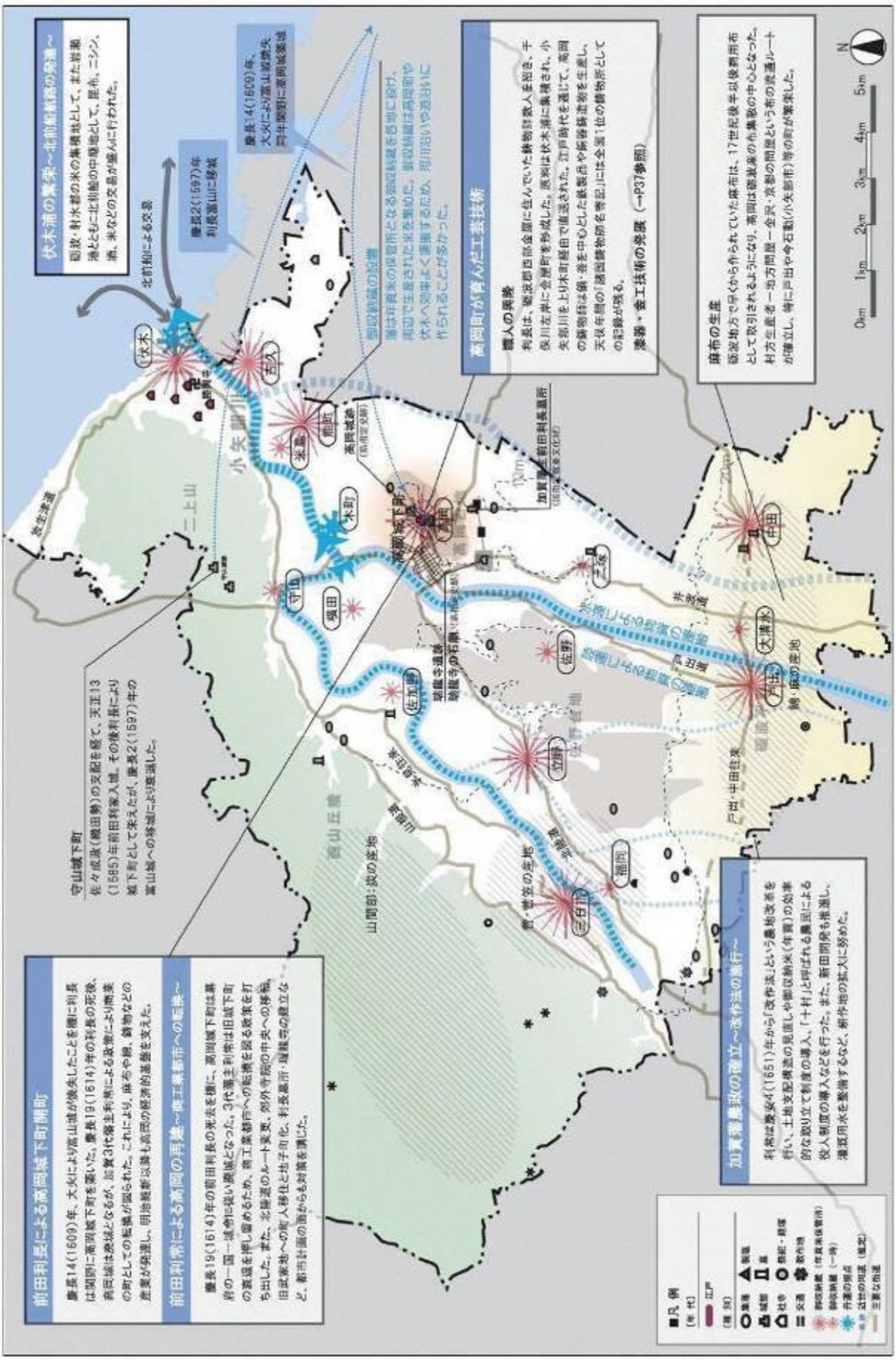
平米町を中心として傘の製造が盛んであった。使いやすく値段が安いので、藩内はもとより信濃、越後にも輸出され、高岡特産の１つであった。貧しい家の家内工業として発達したもので、貧民救済の役割を果たしており、藩も時々産業資金の貸与などをして助成した。

鰐口　元禄９(1696) 年

高岡漆器

菅 笠

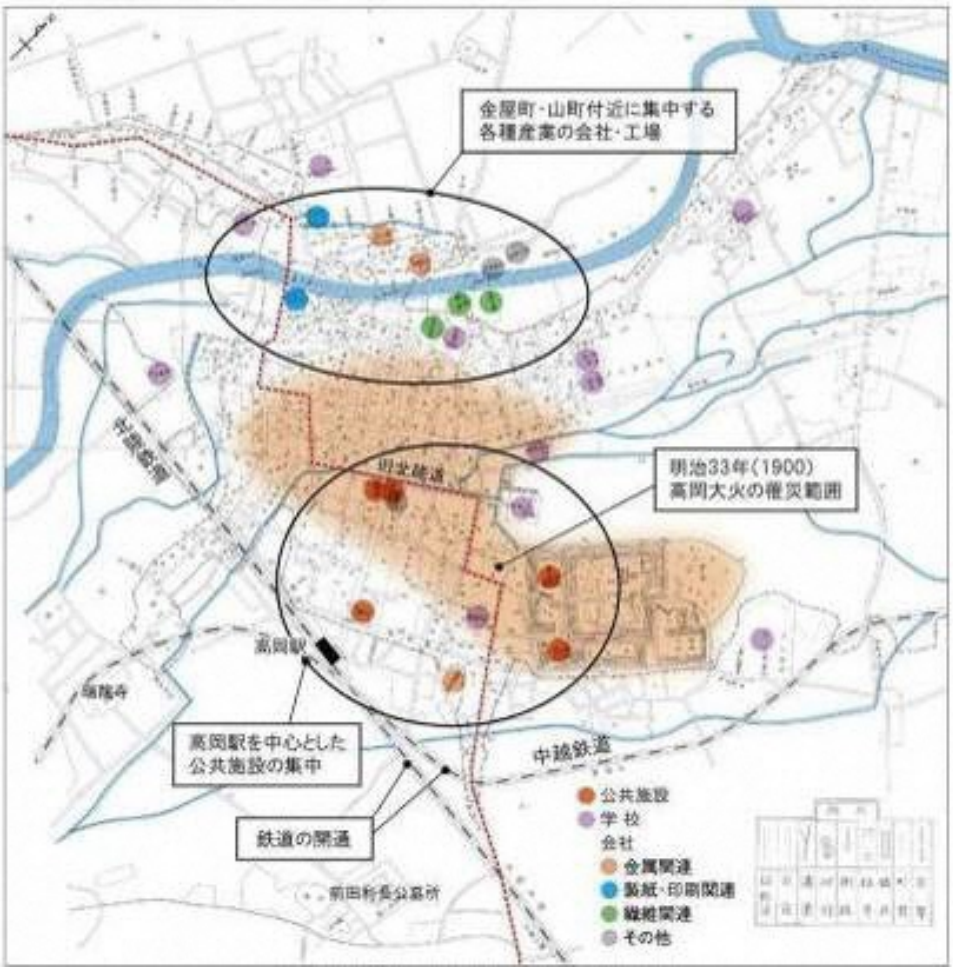
高岡仏壇


伏木港の繁栄～北前船航路の発展～
回船・射水郡の米の集積地として、また岩瀬港とともに北陸地の中継地として、昆布、ニシン、酒、米などの交易が盛んに行われた。
北前船による交易
慶長2(1597)年 利長富山に移城
慶長14(1609)年、大火により富山城焼失 四十間野に高岡城築城
回収穀物の貯蔵
藩は年貢米の保管所となる回収穀物蔵を各地に設け、周辺で生産された米を集め、米収納蔵は高岡町や伏木へ効率よく運搬するため、河川沿いや海辺に作られることが多かった。
高岡町が育んだ工芸技術
鋳人の興隆
利長は、城北西部金屋に住んでいた鋳物師数人を招き、千保川左岸に金屋町を形成した。原料は伏木港に集積され、小矢部川を上り木町経由で搬送された。江戸時代を通じて、高岡の鋳物師は銅・錫を中心とした鉄製品や銅鋳造物を生産し、天保年間の「諸国鋳物師名寄帳」には全国1位の鋳物師としての記録が残る。
漆器・金工技術の発展（→P37参照）
麻布の生産
砺波地方で早くから作られていた麻布は、17世紀後半以後新用布として取引されるようになり、高岡は砺波産の布集散の中心となった。村方出産者－地方問屋－金沢・京都の問屋という布の流通ルートが確立し、城に戸出や今石動(小矢部市)等の町が繁栄した。
0km 1km 2km 3km 4km 5km
N
伏木
古久
米島
稲町
高岡城下町
木町
守山
横田
佐加野
二上山
小矢部川
千保川
千保
佐野
宮野
戸出
大清水
福岡
三日市
高岡城下町
前田利長による高岡城下町開町
慶長14(1609)年、大火により富山城が焼失したことを機に利長は関野に高岡城下町を築いた。慶長19(1614)年の利長の死後、高岡城は廃城となるが、息子3代藩主利常による政策により商業の町としての転換が図られた。これにより、麻布や鋳、鋳物などの産業が発展し、明治維新以降も高岡の経済的基盤を支えた。
前田利常による高岡の再興～商工業都市への転換～
慶長19(1614)年の前田利長の死去を機に、高岡城下町は幕府の一国一城令に従い廃城となった。3代藩主利常は旧城下町の商業を押し留めるため、商工業都市への転換を図る政策を打ち出した。また、北陸道のルート変更、郊外寺院の中央への移転、旧武家地への町人移住と地子町化、利長墓所・瑞龍寺の建立など、都市計画の面からも対策を講じた。
加賀藩農政の確立～改作法の施行～
利常は慶安4(1651)年から「改作法」という農地改革を行い、土地支配構造の見直しや徴収納米(年貢)の効率的な取り立て制度の導入、「十村」と呼ばれる農民による役人制度の導入などを行った。また、新田開発を推進し、灌漑用水を整備するなど、新作地の拡大に努めた。
凡例
(年代)
江戸
(藩名)
集落
城郭
社寺
交通
新田開発（年貢米収納所）
新田開発（一揆）
作業の開始
江戸の開始（幕末）
三重の開始

近世の歴史概要図

(5) 近代

明治維新を受けて武家が没落し、城下町の多くが衰退する中で、高岡はむしろ近世の間に養った実力を発揮する好機としていった。この時期は、高岡町の大商人や伏木の舟問屋、射水・砺波地方の大地主が近世に蓄積した資本を商品取引所や工場などの産業基盤や港湾や鉄道などのインフラ、実業学校などに投資し、日本海側でもいち早く近代化を進め、「北陸の商都」として発展した。高岡の発展は衰えることなく昭和 12 年（1937）の日中戦争以降、国家総動員体制による統制経済の強化されるまで富山県の産業経済の中心にあり続けた。



高岡市街地図−市道路線図−大正９年（1920）

① 商都の近代化

明治４年（1871）年７月、廃藩置県により高岡町を含む射水郡は金沢県に属し、同年 11 月に七尾県、翌５年（1872）に新川県、同９年（1876）には石川県へと所属を変えたが、同 16 年（1883）に現在の富山県が分離独立するに至った。この時富山と高岡の有力者たちは「富山市ニハ県庁ヲ置キ、永ク県治総括ノ地」とし、「商業ノ事ニ至リテハ高岡市之レニ任シ」と地域の発展を目指す協定を約した。

明治 33 年（1900）には、大火により市街地の６割を焼失したが、山町筋では防火に優れた土蔵造りの町並みに姿を変えて復興をとげるなど、商都高岡の発展は衰えることなくその後も続いた。

・高岡米商会所

高岡は、加賀藩随一の米場であったが、明治９年（1876）政府によって全国 14 カ所に米商会所が設立され

た際は、金沢が選ばれ高岡には設置されなかった。高岡の有力者は石川県に設立を出願したが認可を得られず、富山県が独立する際に改めて働きかけ、明治 18 年（1885）に高岡米商会所が開業した。米商会所の米の定期取引は先物取引が可能であり、米の価格は投機的に決定された。高岡米商会所は全国屈指の取引高を誇り、富山県の経済をけん引した。その後高岡米穀取引所と名を変え、昭和 14 年（1939）に米穀配給統制法が施行されるまで続いた。

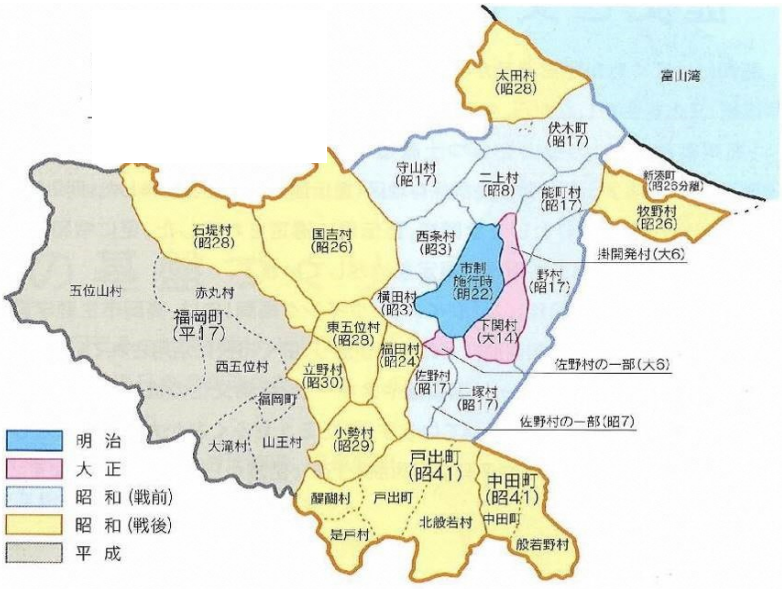
・銀行の設立

明治 22 年（1889）、市制施行と同じ年に高岡の有力者によって高岡銀行が設立され、日清戦争前後の好景気もあり、確固たる地盤を築いた。明治 28 年（1895）には、高岡銀行の経営に参加していない市内外の有力者により高岡共立銀行が設立され、両行は競い合って高岡財界の発展に大きく寄与した。第一次世界大戦後の恐慌の兆しを受けて大正 9 年（1920）両行は合併し、新しい高岡銀行が誕生し、本店は旧高岡共立銀行に置かれた。

② 高岡市の誕生と市域の拡大

明治 21 年（1888）には市制・町村制が発布され、翌年４月１日に藩政時代以来の 62 ヶ町により「高岡市」が誕生した。市制施行と同時に市となった都市は、城下町や日本を代表する港であり、その全国 31 都市の 1 つに高岡が入った。

高岡市は大正６年（1917）に掛開発（かけかいほつ）村・佐野村の一部を編入したことを皮切りに周辺の町村を編入し、市域を広げた。昭和 17 年(1942)には、港を有する伏木町や新湊町らと合併し、昭和 26 年（1951）に新湊町・牧野村の分離があったものの、同年の牧野村の再編入をはじめ、その後も市域を拡大し、昭和 41 年(1966)には戸出町、中田町を編入した。現在の高岡市域は、旧「高岡市」をはじめ、射水郡内１町 12 ヶ村及び砺波郡内の３町 15 ヶ村が基盤となっている。



高岡市域の変遷

③ 地場産業の振興

明治 26 年（1893）、江戸時代以来の綿・木綿の集散地であった高岡町に日本海側初の紡績工場として高岡紡績株式会社が設立され、また同年、八講布の産地として知られた戸出町に戸出物産合資会社が設立されたが、どちらも高岡、戸出それぞれ地元の民間資本のみによるものであった。このように近世に蓄積した商業

資本により近代化が図られた。

また、近世から発達してきた高岡銅器は、近代には国の殖産興業として国内外に広まった。廃藩により職を失った加賀・富山藩の優秀な彫金師を招いたことで、技術力も向上し、万国博覧会へ出品し、入賞を重ねた。明治 27 年（1894）、高岡に県立工芸学校が創設され、生徒の教育だけでなく鋳物や漆器等の技術の研究や製品の開発、デザインの作成まで行い、技術の発展に貢献した。

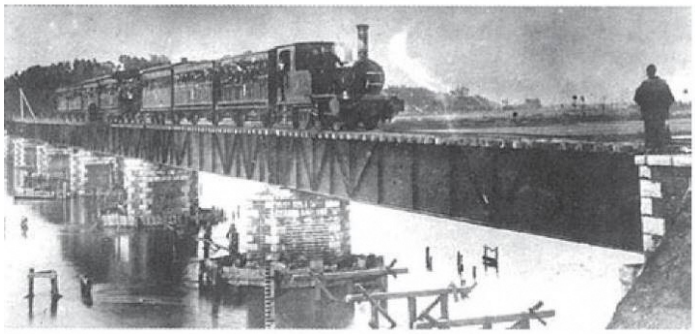
・高岡捺染

江戸時代、「高岡染」は関西で好評を得ていたが、明治時代には関西の染色工業に押され衰退した。しかし、笹原文次（ささはらぶんじ）、井上佐太郎（いのうえさたろう）の 2 人の独創的な功績により、綿友禅の精巧な量産を可能にし、その経済性と京友禅に見劣しない鮮麗な色彩と斬新な意匠によって生産額日本一の実績をもつ地場産業なった。平成の初めごろまで高岡の花形産業の 1 つであった。

④ 流通システムの整備

明治 20 年（1887）の私設鉄道条例や同 25 年（1892）の鉄道敷設法などをきっかけに、物資の大量輸送のため、鉄道の敷設を望む声が高まった。明治 30 年（1897）県内初の鉄道・民営中越鉄道（現 JR 城端線・氷見線）が開通し、同年 12 月に官設北陸鉄道（現 あいの風とやま鉄道）が開通した。明治 32 年（1899）には伏木港の開港場指定され、流通網が整備された。これらは高岡の商業能力の強化に大きな役割を果たした。

伏木港と砺波・射水平野の穀倉地帯を結ぶ大動脈は、小矢部川・庄川等の水運から、鉄道・道路の陸運に変わった。これにより、物資の流通や保管のシステムは河川に沿って設置された御蔵や倉庫を通して行われる形態から、物資の広域的な流通に適う国有鉄道の駅や道路沿いの倉庫等を通して行われる形態へと変化した。

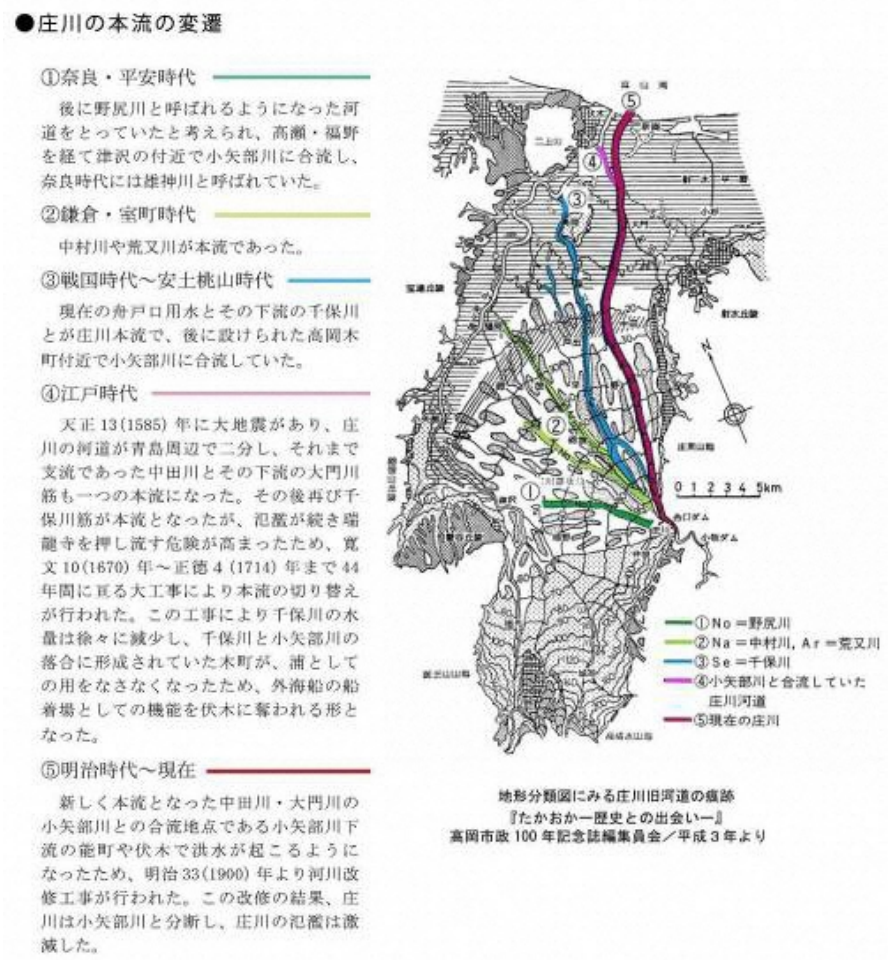


中越鉄道の開通
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』
高岡市立博物館／平成 20 年より

高岡駅（大正）
『高岡開町 370 年市政施行 90 周年記念写真集』
高岡市／昭和 54 年より

・庄川の改修と伏木築港

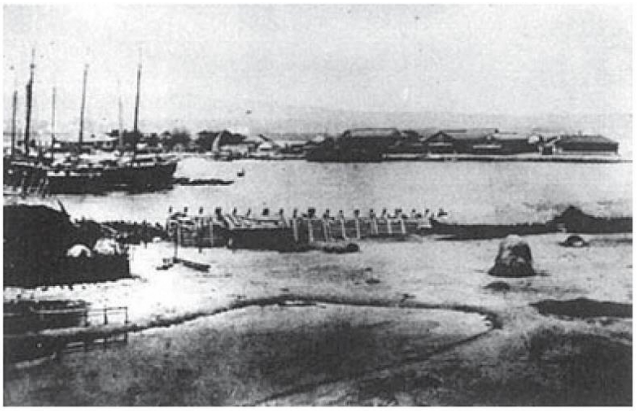
庄川は古くから氾濫を繰り返し、庄川扇状地の西へ東へと何度も本流と支流の位置を変えてきた。伏木港が開港した明治 32 年（1899）当時、伏木港は庄川が合流する小矢部川の河口港であった。河口港は穏やかな水域を確保できる一方で、上流からの土砂が堆積するため常に浚渫する必要があり、洪水の危険性も持った港であった。明治に行われた庄川分離工事により大型汽船が桟橋に接岸できる近代港湾となり、現在の港の原型ができあがった。



地形分類図にみる庄川旧河道の痕跡

・臨海工業地帯の発展

伏木港では、明治40年（1907）、北陸人造肥料会社の設立を皮切りに、大正時代にかけて次々と工場が建ち、日本海沿岸で最も早く臨海工業地帯が形成された。この契機となったのは第１次世界大戦（大正３～７年（1915～1919））の軍需景気で安価な電力、豊富な工業用水、整備された良港を求めた三井などの旧財閥系が資本を投資したことであった。工業地帯の形成に伴い、伏木港も商業港から工業港へとその性格を大きく変えていった。



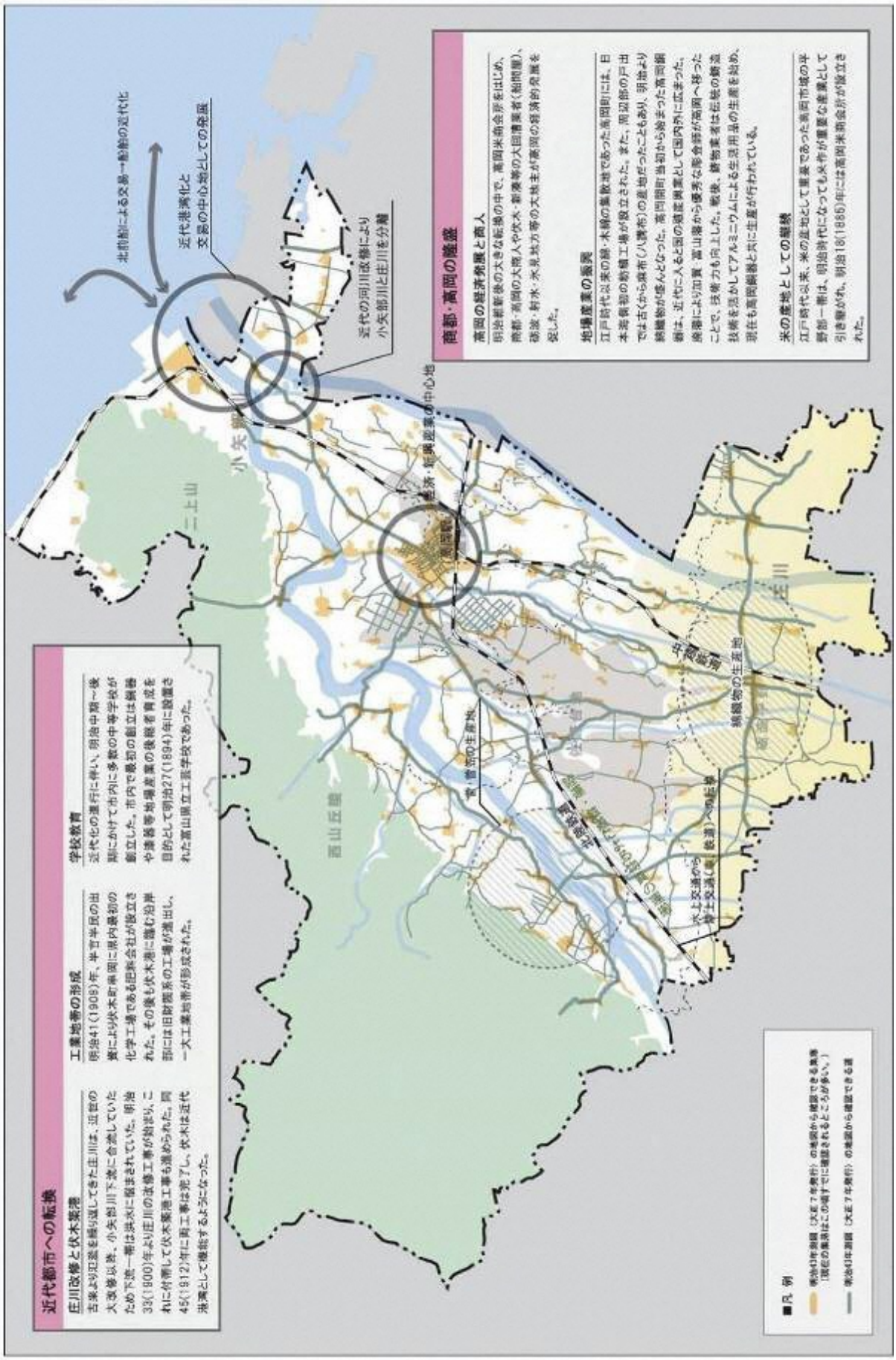
伏木海港場
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』
高岡市立博物館／平成20年より

⑤ 高岡大仏（銅造阿弥陀如来坐像）

坂下町の極楽寺には高さ約9.7mの大仏があったが、文政4年（1821）の大火で焼け、天保14年（1841）に再建されていた。明治33年（1900）の大火で再び焼けてしまう。篤信家の松木宗左衛門（まつきそうざえもん）が大仏再建を志して駆け回り、明治40年（1907）、高岡の名士52名で大仏再建事務所が立ち上げられ、火事に強い銅製の大仏として再建されることとなった。4年後に大仏の頭が完成したが資金難が続き、また、大正８年（1919）に作業中に溶かした銅がこぼれる事故が起きて工事が中断、さらに翌年宗左衛門が亡くなると、工事は完全に停まってしまった。その後、昭和3年（1928）に荻野宗四郎（おぎのそうしろう）が多額の寄付をしたことをきっかけに再建の機運が盛り上がり、さらに銅器職人たちが材料を持ち込み、無償で作業をしてようやく完成し、昭和8年（1933）開眼供養が行われた。

像高7.43mの大仏は、造型、鋳造、研磨、着色まで全ての工程を高岡の職人が担い、官製でも観光用でもなく民間の寄付によってつくられ、銅器のまち高岡のシンボルである。

銅造阿弥陀如来坐像（市指定）


近代都市への転換
庄川改修と伏木築港
古来より氾濫を繰り返してきた庄川は、近世の大改修以降、小矢部川下流に合流していたため下流一帯は洪水に悩まされていた。明治33(1900)年より庄川の改修工事が始まり、これに付帯して伏木築港工事も進められた。同45(1912)年に両工事は完了し、伏木は近代港湾として機能するようになった。
工業地帯の形成
明治41(1908)年、半官半民の出資により伏木町佐岡に県内最初の化学工場である肥料会社が設立された。その後も伏木港に臨む沿岸部には旧財閥系の工場が進出し、一大工業地帯が形成された。
学校教育
近代化の進行に伴い、明治中期～後期にかけて市内に多数の中等学校が創立した。市内で最初の創立は織機や染織等地場産業の後継者育成を目的として明治27(1894)年に設置された富山県立工業学校であった。
北前船による交易→船舶の近代化
近代港湾化と
交易の中心地としての発展
近代の河川改修により
小矢部川と庄川を分離
商都・高岡の繁盛
高岡の経済発展と商人
明治維新後の大きな転換の中で、高岡米穀会所をはじめ、商都・高岡の大商人や伏木・新湊等の入回漕業者(船問屋)、砺波・射水・氷見地方等の大地主が高岡の経済的発展を図った。
地場産業の振興
江戸時代以来の綿・木綿の集散地であった高岡町には、日本海側初の綿織工場が設立された。また、周辺部の戸出では古くから麻布(八講布)の産地だったこともあり、明治より繊維物が盛んとなった。高岡開町当初から始まった高岡銅器は、近代に入ると国の殖産興業として国内外に広まった。産業により加賀・富山藩から優秀な職人が高岡へ移ったことで、技術力も向上した。戦後、鋳物業者は伝統の鋳造技術を活かしてアルミニウムによる生活用品の生産を始め、現在も高岡銅器と共に生産が行われている。
米の産地としての繁栄
江戸時代以来、米の産地として重要であった高岡市域の平野部一帯は、明治時代になっても米作が重要な産業として引き継がれ、明治18(1885)年には高岡米穀会所が設立された。
二上山
小矢部川
庄川
高岡駅
高岡・新興産業の中心地
高岡・新興産業の生産地
綿織物の生産地
■凡例
明治43年測図（大正7年発行）の地図から確認できる鉄道
（現在の鉄道との重ね合わせにて確認されるところが多い。）
明治43年測図（大正7年発行）の地図から確認できる道

近代の歴史概要図

(6) 現代

第二次世界大戦後の高岡は、戦後復興を果たし、高度経済成長期で大きく躍進した。そして平成17年（2005）11月1日に、高岡市は福岡町と合併して新しい高岡市となった。平成27年（2015）の北陸新幹線金沢開業を受けて、新高岡駅を飛騨・越中・能登の玄関口と位置づけ、伝統の金属加工をはじめとした各種工業など多様な産業を育み、「ものづくりのまち高岡」を全国へ発信し、活力と魅力あふれるまちづくりを推進している。

・高岡産業博覧会

高岡産業博覧会は、昭和26年（1951）に高岡古城公園を会場として開催された。この博覧会は、日本の豊富な電源力と産業を紹介しながら、地方産業の振興を目的とし、特に富山県の電力が豊富で安価なことを強くアピールした。50日間の会期中に620,000人以上の入場者を集めた。

・アルミニウム産業

砂型や鋳造技術など高岡の鋳物技術は、アルミニウム加工に共通するところがあり、さらにアルミニウム生成に必要な電力は、水力発電が豊富な富山県では安価で、アルミニウム産業が発展する土壌が備わっていた。昭和6年（1931）満州事変が起き、鉄・銅製品が不足し、アルミニウム製品の需要が増大した。市街地は空襲による被害を免れたので、銅器生産の設備は無傷で残った。兵役を終えた鋳物職人は、伝統の鋳造技術を生かし、軍需物資ではないアルミニウムに目をつけ、生活用品（鍋・釜）を生産した。戦後の物資不足のなか、“作れば売れる”という「鍋釜景気」により、復興の足掛かりをつかんだ。現在、高岡市のアルミニウム産業は、主に住宅用・ビル用の建材を生産し、日本国内の主要な産地になっている。

・民衆駅の地下街

国鉄高岡駅は、明治31年（1898）に建設され、狭隘で老朽化が激しかったため、昭和41年（1966）、日本国有鉄道と地域が共同建設する民衆駅方式で高岡駅（高岡ステーションビル）を建設し、さらに当時は東京、大阪、名古屋、福岡のほか札幌や横浜、岡山など数えるほどしかなかった地下街を昭和44年（1969）に建設している。高岡駅地下街には多くの人が訪れにぎわった。

・現代のものづくり

高度経済成長の好景気で会社などの記念品の注文が増え、高岡の銅器は最盛期を迎えた。その後の景気の悪化の中でも設備を近代化させ、鋳込みや着色技術の向上などによって発展し、昭和50年（1975）には高岡銅器が国の伝統的工芸品に指定された。

近年は、錫を活かした食器や銅器着色技術を活かした服飾など高岡発の技術が幅広い分野で躍動している。また、銅や鉄だけでなく、亜鉛、錫、アルミなど様々な素材を使ったものづくりのほか、高岡漆器や越中福岡の菅笠の伝統産業技術を活かした商品開発などが行われている。ものづくりのまち高岡では伝統産業だけでなく多岐にわたる製品・技術の開発が行われ、発展を続けている。

・ものづくり・デザイン科

平成18年（2006）、「ものづくり・デザイン人材育成特区」の認定を受けて、市独自の教科「ものづくり・デザイン科」を市内すべての小・中・義務教育・特別支援学校の小学５年から中学１年までの必修とした。伝統工芸品制作の見学や、制作体験などを行い、郷土の伝統的工芸品や産業やすぐれた技術をもつ人々に触れ、豊かな感性と郷土を愛する心を育んでいる。